

『命をあずかるということ』



私が飼っているフレンチブルドッグは、けっして「飼いやすい」犬種ではありません。かつては二頭いて、先住犬のマルゴ（オス）は8歳6か月で旅立ってしまいました。そのわずか二ヵ月前に突然起こした癲癇の発作が24時間続く重篤な状況になって、あれよあれよという間の別れでした。

それまでもマルゴは小さなときから胃腸が弱く、また食物アレルギーもあって、ひどいときは毎週末のように獣医さんにお世話になっていました。あるときは与えていたフードが原因で血を吐き、真夜中に救急病院に半泣きで駆け込みました。仕事でくたくたになって帰ってきて、やれやれご飯でも食べて寝ようかというときに具合が悪くなるのです。タクシーを呼び、点滴や注射をしてもらい、家にたどり着くと明け方なんていうこともしょっちゅうでした。病院に行けばお金がかかります。夜中であればなおのことです。身体もぼろぼろになります。寝る時間

も削らなくてはなりません。つまりなんだかんだと手がかかる犬なのです。

ですからどう考えても「飼いやすい」犬種のはずがありません。もちろん我が家の先住犬がとりわけ身体が弱かったのかもしれませんが、同じフレンチブルドッグを飼う方たちの話を聞くと、やはり多かれ少なかれ皮膚やアレルギー、関節の問題をかかえているようです。

でも、マルゴは夫と私にとって最高の「仲間」であり、まちがいなく大事な大事な家族でした。マルゴは哲学者のような遠くを見ている瞳を持ち、静かにいつも足元において、なんでも分かっていました。

ややこしいことも、面倒なことも、話せば受け止めてくれました。そんな高貴な雰囲気をかもし反面、ちょっとした階段を踏み外したりするドンくささ、寝るときはあおむけの大の字という無防備さをあわせもっていて、ときどきクスリと笑わせてくれる存在でもありました。どれほど手がかかっても、心底愛しいと思える存在でした。

でもマルゴを飼うときにあらゆるフレンチブルドッグについての本を読み漁りましたが、そこには判で押したように「ペットとして飼いやすい」と必ず書かれ

ていました。

確かに、無駄に吠えませんが、愛嬌があります。飼い主に対して愛情を返してくれる甘えん坊でもあります。

でもだからといって「飼いやすい」わけではありません。短毛種ですが、季節の変わり目には毛も抜けます。毛が抜けなくていいですね～とよく言われますが、まったくの誤解です。抜けた毛は短くて刺さるので痛いぐらいです。だいたい毛が一本も抜けない犬など存在するはずがありません。

鼻がつぶれた短頭種ですから見た目は愛嬌たっぷりですが、実際には体温調節が苦手、暑さ、寒さどちらも弱いというオマケがついてきます。

そうなんです。こちらの道理が通らないことが往々にして起きるのがペットと暮らすことそのものなのだと思うのです。

命を預かることはそういうことなのではないでしょうか。

「飼いやすい」と聞いて飼ったら予想もしなかったことが起きた……。そんなことで捨てられる犬や猫がどれほどいることか。

人間の暮らしに沿うように100%「飼いやすい」ペットがいるとしたら、それはぬいぐるみかもしれません。生きている命にはさまざまなことが起きるのです。

そんな大切なことをマルゴが教えてくれました。心配する命があることがどんなに私を育ててくれたか。今は一匹になったマルゴの妹分のいちごと毎日てんやわんや暮らしています。



ニュースキャスター 安藤優子

A handwritten signature in black ink, written in a cursive style, positioned to the right of the text 'ニュースキャスター 安藤優子'.